

80

75

70

65

中村俊定文庫
文庫 18
920
1

古今圖書集成

卷之二十一

古今圖書集成



よぢやぢよ海のよきことみれよきふに
えとあるこれもくわいよれあみた
きよくこくかくきじをすくとてわくめ
そめやの松青ぬ ちはやくよあり温の心
ぬしあく 诚乃立ちせよとれけう
今夜あくまきともあらうとひやれう
ほくらむる文章をあつめそよぎて
持翁友垣集とひむよくら書き下す

おのれこれみちはえまぬまねともゆうれ
りゆひかくみふられそらひうちありて
ものとようもくあらあつててももよ
そいとようもくあらあつててももよ
なほけくそりきをとす携てあくゆう
手のとれありもしーけよーけふのゆ
まの隊々ぬくあせよるく様うへ
己もてゆくまくみーうわくーうく

してちのものはやしてくちまくを秋の
力あすてあそてれらせせ源ある以次やむ
され素交う等てこあめよりはや一等う難
くのあひゆれつれ枝はくとおどひく
らせもとて一等うまたひてこねまち
くらむねはくーりとおこくアリ
せまちほておひてくまくとあとたも
せとああもくゆくのりてからぬ者へ

あくまでもおろこ不そてこの集梓
急にきておまかせをひくはせらばもす
せりとよおこゑりけねを承るの後れをまひ
し今とくとめおまかせりつをゆるふれ
みよて思ふこと誰をそむくにうちひて
あまへとむかひぬ

伊能高老

明治十四年五月

文題目次

新年 梁空

逢峰常徳書

家前ゆき

山中観音

郵便

家中写郎公

写生

貴秋七草花

山家秋月

乞蒼翁契

枯坐冷吟

冬祝



新まかで雪

甘海

雅歌嘗度のつゝと齋は因まく松木と立はぬ
あら純むまくへゆき皇國ふるのまくいしまやよ
まくゆくのきやまくがたまくわきを宣化の野
まくゆくはまくや吹き草の物まくと扇まく
うけまくゆくかまくの年めちまくちまく
降年めかまくおてつゝのねふ枝ててまくのまく
まくゆくまくゆくまくゆくあらく雪のまく枝て
まくゆくまくゆくまくゆくあらく雪のまく枝て

萬氏被後の秋と暮れの首領の田舎とアモヤ
彦高川を逍遙せんとそろは興すを枝と葉と
心をもつておもひのめあらう事とせん
まことに身と心と快いりとせぬ

時々空や影一葉と着るが

水年

豊吉原の華新もあらみ國の風すをひま
以て稻葉が前まにうきはやまけハ半種の
稻わくこえまくまくとく様を経てやれや
アツシテ稻葉すましれを庭の面を駢の木を
もまくとてあらまきがきよら射をあれ、まくは
アリケキマキマキよほ垣の田鶴をゆのう毛衣を
かきぬくすまのきくとましん射けとねどいの
すまくかきぬくよろまくまきのう度痴毛
駢革解り放つみうちかく降たまの射を
りつて穿にものもてて豊吉一葉の首の隣
をもとねりまよひうらむき御代をこなせ紀
ノ

孝 玉

朝の晴れ 本日はやうに御みゆきのほりつ雪の
日より 彩雲を走る御都一例が加敷へおめよ
映るにまかせ御禮をもとめ共のあくちに
寧まほのすのを仕むとや仰ひし
さうぞそちうねまわせ光あれ

龍 山

所の角雨のとく立つて山陰の白雲に、まくらぐ
鶴絛をねねぬじよけうるあす宝珠の陽あけを雪に
寒風は北ありて雨雪を吹矢の陽をも苦も今
やうの和了うめ雪の月うつ重くそ稀
うなぎ行へあまを深くそ挿じもせず浮遊
ゆきのまきとくとくまく

居たまらやあの方お家をよむ

遙峰草暖玉

甘 油

春秋夕翠行きまくらて山陰行 四野
志はふす音をうきゆめのとこつるやくよ
かくらむをすこまし煙をもけうれまくら

水手

未
降

若狭の山をやうの名手 やくふわいあくとおひ
うの面が、うきよ處を考るの教へをもとめよ
まよせよまよせよ山の多様の多様の女夫
の二紳 声は角をなすれどや まじめをせし
あ能とゆゑひ力もあらわらうと仰まんる
ゆくへのくまもとつやまはくに誰わだれ乃
経りゆゆゆゆ

江漢

山毛や紫の葉あくまで
枝のまき枝と陽射すらも
さむれてもさうりんじよ木をばらの
東北とすまくまわらかに相す
祖廟に後を続く者をまゐるの
所は遙かにゆきとめの
かくは仙向ふのそくは
餘情をもせぬとすてて
陰をまかす

宿ナツクシニヤムアキ常民の山

池住

今わのちくわきは年一考の秋の月の
うちかをつまも山又山のいやうへ田耕井も
幸いうれと佐保郷のわしむらをかかせ
あそび吹きよタノものも一入をすくぢぢろ
すくぢ

窓前聞管

甘清

年利善のあゝ森ち一ノ木ノ木はさんだ
すみかくの経も獨つて事は不難りて古人を
まゝ氣数と接せんとすが一匂ひゆ
すくんまことにあれとひきかねて続で
の身勞子すやち代りをとさくまのあら
やて隣住の御のほとま龍ら秋葉と春霜室
の秋ノ來啼る音の初音に持くチ子の聲を
耳を時よと交ゆすすめよとめよとめよと
風情字於より都の匂へうきを惜し
すくんやきのよのよのよのよのよのよのよ

清江五

地僻
の處行
きをもと
梅のうらは
はまめの水桶子
家計甚
頃まく風情の家と
かみよまく通
きたりひつゝ一
きくと過りま
まくと指
さすのは、
の内をめ、
やまくせば
くと指
ちむくと
れ、うのわを
まくとさ
れあくと
せざるの
萬歳越の福井

卷之三

水系

考ぢてうなづひよあらゆる、まことにとわす
ちうれをまことに思ふにあらかがるるのやう
きふまゐのゆゑとあらじ角をまわしけ
くまはやう移ひ氣を黒い水をまわせ
くまをまわすまの物をかきこまへる
るのゆゑとたゞうぢのむと等るやうをう
まくそつひよ曉の霜とみはれられぬも野の

名とゆきや外
丈さるは哉あす
ち経えどもゆゆの
多船りに新しめ字ゆくにゆを多く朝霞と
ワツシテとゆる言ふ年に事あらうすむ幸
をすまき

李卿

梅を度能にかきつ高く柳を陶の文を
すくはや竹若をくわせの舞とさけ小
窓を開ひたれも空と近い新緑の日暮
もくニシイ明友あらそぞく登とあら
琴と圓三葉成草履とぬく筆情がくほ
庭をうつ秋聲子さくよし文アモと原ド
草とやまくにうるまの毛とあらんとおと
すつやすを歌の歌は沙翁不思議を歌
うすすみんれ

李卿

李卿名すよ初名れ里よ里店にて老とす
くはれはれまめ歌とうきのうゆく初音の行
きあら二月のやうよもとよゆく秋扇うきのう

やうりて夜のあやうやだりぬれまし
よみゆせらるとや度のあらく耳傳
初音はうきだりありとゆつむちや
末を解よまひるねえと遊ひくわれのえ
柳音とのあま葉音と柳音と通ひて
うす種はまめを事けと絶歎あらむす
ちしゆうを御こゑにわたりをもとおもれ
實りされ風情の友がくま

謹 証

一日雪がてま庭やうをつらやわは白梅既可
御ふるよ抑移り事とせまきかとせん
ようゆうはまそつはまゆゆゆくらうとまくら
せまくらうやうやうゆくらうに事とせまくら
うやうやうゆくらう一あはせまくらう事と
せまくらう事とせまくらう事とせまくらう
事とせまくらう事とせまくらう事とせまくらう

雨中観月

甘 沢

うむ用ひて天の娘ともいふ
ゆうとまく風よ男まはゆる御生ゆくや
人まく代はりまつりもむらん苦鐵と名を
むすび初めのゆゑと稱へ奉ゆる事ゆく
とゆゑまく十日のおもむをゆきて命を保つ
まくあれまくことけづくつる
半身まくも安まくかかと深得法行を悦
まくは傳説家をまよひて之が近き成
まくれもまよひて之が近き成
中能く修りたる所あればまくことく
日本國の御生ゆくにそぞれともよのまくやまく
おひきまくはまく能く能くまくや天あ
風よ御生ゆく者まくせよまくやあとわく
たまくねく精さく

海
御
事
事
也
も
の

拾
遺

降りてゆきとよゆる考るのみやく時もやうやく
うそやうそおもふよかといふと考ふたわざと主事と
山の字をひいてはいふとつづらひよ御

うを夢とすて殊々心事多後又病り竹
東坡を接せよがれも庵を修へて後日
友人にはまくらに坐りうれ
きもあらはる只心のゆふくらむをせせ
ひまくまほつともおもむくおもむく
もくらんやうむきのまく筆記と見て
かたなる計きくを向てや面のを

禾 海

かくかくすうとくあ彼あまのあらじ鳥さき
かくかくのゆめせせよ下りてあす兄弟の元
ゆく様前をもうたよせよもんへんちもうり
ゆく前をもうせよに苦惱のゆくをなされと
うやまん用やせんとむすせよゆくの切わくを
まくく人のことあらんとすよきせよ
日和りかくうとむすせよもとむくのゆ
ゆくゆくよむくとくつづくをものゆくまの
やうむくらひぬけうのゆくとくわせよと
みまくの相うとくわせよとくわせよと
むくわせよとくわせよとくわせよと

まよひとあはれ

ほのきゆゑをとむらじやかなを

涼 卷

月をうそて月を缺むうそと花は隕く風狂の
寒氣りふるふる珠洒落す六風狂のをあは
今や春風促のをやうめくはるく那葉をもれ
うきの雪を傍すうきのあり雨の降りて
さくらの散集はくまちくまとはハナの花方の春
めぐらむとちの虚とまく用狂の魂とくまくま

立 番

月うせきよがちうせき飾數度瓢箪うを
あくやせうかうけうけうけうけうけうを
うううのううううううううううううう
むうううううううううううううううう
むうううううううううううううううう
ううううううううううううううううう

陽の光波うるゝ音が葉へも株を風へももの
まことうへと修まつてはれど以ひかんむ
風の音をもつてらすをすり葉うちもく風を
うちもく風へありへり能くもはくまく
もと風にすよへとくちやふ雨中一枝
花もく白よ風じゆづきの枝と麻をまくや

隆江

一序二首半年のうちりてたすれども春あれ
候の初を嘗めけぬれども一春の候とま
事きくれどもあらぬわざよひれども過
ちんくくれどもあらぬわざよひれども過
獨守を考のう計のうれすりれども重慶
すうきのう

やまきやまきやまきや花のう

松東

宿をまかしのほきとすまけまゆりう月
夜のもは六州そよち重慶暮月の秋の夕
まくいゆへとくもすまけまゆりうかやよ連

ソノハ居リトモキモナシの程、トニテ空ニヤ團
のミタリモトシ國ニシムキモナシ。シテ此は
者ニシムトヨリ物トシテガシテアリ。モカ
チハモヤマツリルトシテ、シテアリ。モカ
ミノモヤマツリルトシテ、シテアリ。

神書

清々とおもふれども花衣

郵役

甘海

文部物理日記印行所多聞堂

萬國ノ郵電之電波郵便の妙用皆有行
事此大時代ニシム日本風氣子等ニシム
色色の郵便とタメテ被除の海より多く郵便
有利其事とシテ、夫子曰德之流行速於
置郵而傳命トシテ、

一死の端本ノアリヤウル
風月の末易ニシムモノを
志名争ひ嘗他社ノ店
年代の人情雅俗通庶

聽松

汝の御子も新羅を命を作つてつゝも
まみやことは新羅をくにひゆの所よ墨を
くじ民の信義と解くまづくに行の又に御あ
けく 金華ハ國難の奴數て半身の新羅ち
一筆書の使房を凌れ重程ノ登り行を使房
萬里の高倉を守るを紅旗を拂ひの蘇武嘆
むんや

此の命の序ははるかに惜ましき

介々

聞君新羅を出づぬ友也やよきもくす
西東北の新羅に化とぞ新羅歩
本とぞりきまことに経數里と隔てて不復也と
もいたやいの傳事の役りを夏月に廻了
秋の暮れをよしむに新羅ノ一ノ興きある
ヨリたまふる今を新羅を新羅を以てよし
四百段アリテテカニモ度人の如く文政後
さうりの生むれ八月は陰陽寺のまほ下から
うるわの作のアリテテ新羅を新羅を

も
う
さ
く
き
ち
か
く
す
ま
る
と
も
の
あ
り

蒙古文

者而

まわる都度身をひき取る事あつて人風の波とおもふ
山あはを傷めの間支を仰ぐる時芳翠は花を乞
すむ行つゝ者多く更科焼梅の月を咲かしの
才林のゆく城代の重臣まことに歴史印後
ひきよちうそうわくせきの印もけり其ゆゑかへて
すまうやうに恨みと筆をもじり思情乃
人自らまのあ裏を拂ひきく達をあらそひ思國をも

さういふまことに之の時

澄江

元氣のもとを失へや二重の星と未だ絆
生まざれば未だ三十度餘り中より動くと
足らずか歩き度て、此は利と種じの所也
初不思議すがのうの只者もれん情乃
移り、身も心も如々都便れ新
あらわすも

廿九日之初候の朝より今日の自生
がくの事より多くは時事の事よりあ
事の御用事も心配に便へる

新中間時を

甘 海

五月の日水をさしや落葉をまきを酒に
香用川をほのぼりて垣切の里の音を高きと見
んと五七句橋の袂より舟をさうて先に圍み
草をすそと過る日とくと竹影の梢より玉と
柳つむぎより此身の聲をよぶの如きと

一葉の草くそくもとや树を

か早はるみを経てゆくかくの趣向とさ
まく植木はけ行なうと歌と聲で橋よのゆうと
歌うてお歌ふ對うつづき歌う垣切の歌行は
又歌うてゆうてお歌うてお歌うてお歌うて
歌うてお歌うてお歌うてお歌うてお歌うて
うね一聲うね歌うてお歌うてお歌うてお歌うて
歌うてお歌う

はとしをひきやんせ月は歩ゆアモシマト
シテサキノシテの歌とまくは事間りとのも
花うは事さくらむるもくとあくは夜のもの
葉うは事さくら石屋のまゆうたす中井狂杜
をとしお様めり草木れをまみすわ
まみすは月はりとつてすすれ一走道よ叩く
水野を魄人の物語よ情やまくらふ云霞
の歌よあくま枝を枝ひて風を吹くすむか
まみすは月はりとおれあくまゆかの雲うち
國松をたて海行うきくれあくまゆかの雲うち

うあくま材の松葉初う材のうりう光と
うく尾をの付字を起さうとお、家の様を
枕ふ立更に近くまくにせまくわくまくにれと
往くへ田江のうとうう啼りてれ一もくにせ
一まのゆう日はのゆうちよ是れおまくねとすけ
葉を取ておまくねとすけ

一まくねとすけ

甲子代耕の連歌
中井の思ひ事

二 京

遣せどもこれ故事く至難せば行はざまを写
すよきと捨てしとすち生く竹原の行處
かわは向林の事合ひがよしりを覗むとて可
うけ個子と申じしるを富士山とす
提て扇と叫び以て能之野の人おれ角
れらにまきあゆかくいはば波江の水多
津多キたる事多有ふ山の傍手ある山水
すらすら

ナウシテ行ひ止し候とぞ

伯山

要すう院軍のゆきあゝ鶴鳥歌用新
衣紋路へゆき通す而御事
立やうかふ神の御さんのが身鳥
経者のまゆをかそくやくす
三者協力小サ子毛計のゆきつと通稱
そんと協力も軍田川を横まちとよ堤を
やもしけれまををやま御身御身
おゆきゆく眼と耳をはめや計部とて

題まぢうらうかくうれうとれうとくと墨猪あじして
せうまくうまくうめあめあめあめあめあめあめ

五味

都すすう家をひきうちたまくふ病をもくとれ
和自びく毛屋冰の腰さんと酒肴樂の小籠よ
掉く様にやうてうのをばくちむか字
後くほのむくと御三園乃くにたゞくとくとく
風鈴子をあらは夜更鼓月をせぬるやうの年
うゆゆやうゆゆうゆゆうゆゆうゆゆうゆゆ
壁に月白く風鈴と以てお初やとお月に海
うゆくと年月よすううう衣風う吟一村す柳とそ
高柳に花無くれや柳青り青り柳れあと
ゆく花をやうて香柳是彼のあはれ夢の
鶯うううううううううううううううう
うううううううううううううううううううう

北住

豪園う掉まほまほまほまほまほまほまほ
をの移もあらうらうやあらうらうらうらうら

かのをもと
おまえやつる
事あら
守る事あら
かのをもと
おまえやつる
事あら

寒冰

まゝの川中に初財を貰ふ事かとて嘆息され
郭子卿を機知くもす、前
と口をあてておけり酒約、まさに酒を飲
都もあれどこよまで興ゆくつまらぬが
ゆじるをすまへ

寫生　甘海

手國支那の為めにけりうる敢争利の
株械もんじゆもんじゆふるきの御もんじゆが
き付く行ひ　ちゆくの事もんじゆが
この新とくはくとせきとせきとせきとせき
君たゞまよまゆそひすまよまゆそひすま
男女の恋情、歌　うき新と書く所くわく情下
いきまよまよまよまよまよまよまよまよま
き付くはくとせきとせきとせきとせきとせき
まよまよまよまよまよまよまよまよまよま
自傷すうじやうじやうじやうじやうじ
はすが、草のぬ　六十の老
風月を取ふ心事あり素中甚き

支人事と衣冠の如きの如きを
家事と稱せしと寫るなり家

又

近頃空を載せ都に波を墨
眼をもと小鹿子耳をもとふけ
口は鼻が如くまことに之は傍
走りて其の如きを写すと筆

文雅

者の服装とハ圓字特有の裝模の像を圖

之を起すニ毛を加へぬれを又は絶毛行
評妙ふ多々之にや懐く人を車く者
時と度を以て之の如き夫の體の所 様々陳すと
妙文アリ取アリ也 何神 写寫を而す
乃時の如きあらざんまく之を以て、う姑
程行川一聲變もあひそれ已に是より下て
大よろ便つとやま従ひあらか今之を多
所勝瞭能く一聲變もたゞすがされ
辛く實を勝つを勝つをなす聲を写すと書る
留もす 実は其妙の妙能也

李 鄉

市寧をや物あつたすり。重きの御行はうる
御の御もあすり。おみそと極く居ましの事
したむをうけた内に、すこし、度もあはせ
まことに民事のまゝまうち角らのアラシ
モ一枝も下さがことねり。争ひて上苑へ
四道のままぬもまきり。取れめつも、や、森林
豪傑がそぞううやうにゆかふとて、まのめを連せ

青 鳥

候のかづけと、けつを経、一と、ひきんぐ
星移す月うきよを、すく、筆すむ而影の跡
風すや、春す日ふ影す、新す、夢の跡、留ま
と、心す、航本すよを、今、記たまし鶴の
声す、かねて、新す、仕事す、さうを終りる
行す、海外す、まみえす、もまのあうえ
せりひとす、うの聲す、人を仰り、そを
思ふ、さんとす、むしの、人や、夢を、残つて
亮す、うの、美歸人す、而前就とて、すす

御のまことにあらすじをあわせしゆや等が
がくちぢりあらむかせきとくすくまふほん
近づきに従軍の兵へんが立たれ時のさうゆを
おもひきよてまくらるる御行軍の拂

もとを写すの源和ノシ也

主計以當ぬ人を友乃まわらの下

柳 湖

星にまぐり毛汗擦つゝとくや軍のうひきとと
事はまくらむやくらまの多くまくらやにまくらがま
ひまくらとまくらとまくらせまくらと此御よじせ
まくらと月をまくらすまくらとく少情名縁の風
致をまくらまくら夜冠印くまくらまくらまくら
よまくらまくらまくら貴牌軍ゆと春と将校を
或風むだまくらと拂ふ留子と一優れなれ
紳士あまは高達ノ波のゆれ高面行
やめく 補の時斗ふまくらまくらと放ち時
の部ある松葉風をゆづつづりゆれ拂が
まくらと拂まくらまくらゆく拂まくらおとと
用ひにゆく 仇をあらねやうとまくら源行の

強枝をさむはあんじき）御神（ごみ
徳優の御ふ魂とさうぢにしゆるを仰
歌とおれおまえ御（おもてあらむおまえ）
おまえあらむおれおまえ事（こと）とくは
波音（なみね）の音を徳（とく）せめ附（つ）
あんと九牛（くぎゅう）のてもと聲（こゑ）もまの事（こと）おれ

かくもほとくわくとくよと寫（う）まされ

魯（ろ）生（じやう）

行浦のとく経り哉き一老ひまむらむすは
寺里がまゐあらそをまのううう枕のう
魚ねりわいへもりううううううううう
度しきとくとくとくとくとくとくとくとく
鏡面には裏のうううううううううう
あらうううううううううううううう
建てる

たれどもまかに終るや枯らる
写

松本

うちじい写
うううううううううううううう
うううううううううううううう
うううううううううううううう
学校建築のよつけとある府廳とううう
うううううううううううううう
うううううううううううううう

写
古人の形影自相憐とふ事もあらず
とせぬ者とまことにあらうううう

せうと嘆

賞秋七言句

甘 海

鶴鷗冥る白し草舟萬葉と七小町の更衣よ若と
ゆき一ハツのひいづるくのれもつたゞや
秋の七言葉の吟詠をかみかかれて十射の経て
ちかくへ寄てヲをくわすに提多一聲秋風よ
うまくおほほよせられねく尾よかくすゑ
首をひきぬれ翁よみきをかくらむす御禱
翁よ病魔よ吹けんとみゆく一叶か
わくかくは峰原野す行く者とくわくく
わくかくやまくまの一枯を被る小町の一生す
かく六四 甚衰才く
よその宿若翁よ否そ結夕行く

永 年

僕等ともどもまことにあらすじ極殊ひまほ秋葉の
色變り初めに候出でと朝くわく申すと
なく承らんくるやいもゆる中々の葉が
角されば厚を薄むれむれをあく

又誰も手を取らぬ所を以て之を御す事無
事乃身の事と申す事も何うか此後はかく
高木君の事と申すに莫宣の將媚がおまへ給れ
まへりまへりつねすさへすかうて數々さだれ
やまこころまへてつるやくおのづけ聖守
うきしゆさまであくまくゆきと重い角

三 沙

那須御子の原野殺生石と高翁大師の法力
お神の御心と高翁と歎く要氣も消え
より魔風毒の吹き止む事も終て村のあれ
きのうの事と申す事と申す事とがやく風情
きわみの餘と申す事と似て申す事と尋ね
まちうの尾光と高翁と申す事と申す事と
沙羅子七子の事と申す事と尋ねまちう
を申す事と申す事と申す事と申す事と

鈴名和家と申す事と申す事と申す事と

聽松

松の葉下にむかへるを数まつかるか
さすての名所は物のやうをもつて
人あがむる處によきゆかのくらむと
まづいと詠むるあめのくらむと
かへるをほむとさむくとひけむと
ちぢむとほむとあめくわむとせりて
まむすらむとほむとせりて
ゆきとほむとせりて松の葉下にうちとや
かくとほむとせりて

冬の毛衣とくふくの眼鏡

和 佐

そぞひおかくまつれはゆくろやの舞すゆ
七絃のやよすくゆくゆくもと絃をまきとゆれ
ゆれ古歌はまくらもとほ生てゆくゆくの
森をゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

お宿行ひをゆくむけ 留意もすまつせりる
うかうかとすまはづ拂ひ うきよれ

渡江

さすと考ふる處アレ夏の日がたきとまへみだ
船を拂ひまわはれと今又以テハシモ
アラクアキアリタヌク船を拂ひぬと御前
御事多事の事の事ナツメニ又月のあをほの
片陽ア 沈みしとゆきひうちをそぞう
小舟を舟に遇アリモアリ江の舟は吹打を

アラクアリモ空の音をまかず 草原ア
アラクアリモ空の音をまかず 草原ア

まちの草の風の方を纏ふるすも

松吉

林木のせりのるの下にあらひては
古事記のけむれに侍あらむをうと高きて
うれり草木がものまき枝を引くに移
有りうきいと
御のむそり神のそ
御やあらかく下を枝役以て
さねゆれのれひぬれおれ能をうめく
きわくたと叶とくくへりやれやちまく
御はくのうれやせ草

さくまくいへんをくしや男隠

山家觀月 甘海

多くの人を深山本原不ふやまくの處の
望國よりすすんでをすくまく厭ふ老をすくま
角一月もたまひてはくと西原よ山泊里老の
宿をすくまくすくまく多くて山被野亭に
清光を嘗ては故郷の音速せずすくまく
まきは市若緑庵よじて夜をのまんむすくま
中少引半下渴渴と歎き嘆きに重を歌
大竹を用ひかかひじ鹿をありて歩情に
定ひの村鄰翁躬度を告ぐ月ハ西山に

筆記ノアラ

宿毛ノホトト新正月の経

又見

唐經書下は若翁於此山家精月の題句
信之子をまゆまの御詩表も月の光るを記
之をうつとくふくと公佐仰和歌を体裁
白きよしん本多喜久也色もとくとて鶴の
音を助かることをもと月をゆゑのちとせ
あらしれをやのつて唐風を詠念を起す
甘酒代りてあるの時自をアリタキアリタ
の内アリタリタ行つておだすおととを後
サ漏アリタリモ範祖也のうに地をひき
うれえされやアリタキアリ日が暮れやアリ
吉本アリタキアリモ人情の徳をも今も
ゆアリタキアリモのうに地をひき日と因みら
うすれで少林のやうをアリルアリ

名前やよしやよしの海にそびえ立つまくまく

二 京

高柿 家代
あすか、此處に隠れ
カツの水引 鮎子とさざえ
尋ねる人の日記は未だ沙汰を
くられ即 黒雲草付
左之助が鷺山寺で
の年月)。うなぎ屋勘定者
猪子内緒の立ちと
たまごの山中 岩手の事
月と近松屋勘定
行商代りさとひの家代と申す
多き情へと一歩踏み出る事よ取扱い

卷之三

の如きを年々の秋方より常づけ因に角歌故し乃
第原了以爲之也少祐の月字章以四友新書
入定の事無事飯芋汁と青核子の事也
月考了以獨酒と酌風香野種と獨襟と
斗風石酒と御酒と御酒と御酒と御酒と
竹う葉う葉と以爲もあくと御酒と御酒と御酒
夜も以爲もあくと御酒と御酒と御酒と御酒
御酒と御酒と御酒と御酒と御酒と御酒
御酒と御酒と御酒と御酒と御酒と御酒

乃にてお望み下り 船とゆきゆもあ候
仲夏よりはおふるそと詠くやうとあ
あらわすやうにほんをもじりて書きましたのう
深省と教きもよろしく筆華りさうひ芋けな
贈つてせ佛せ事あり ああひもたゞ地蔵よ此
一處の時月行ひのむゆき 明日あそとゆき
えきが音ひのうやうを前へすり古人今人の
うゑびせり行を體思文體がくらうとおもや
例詩とまじ言語くわ一言かく天知ひや法
被入方舟店せの十草の聲ふやれ 月夜あ一見
やうせきをくらうとあまぢ難いもの十人十弓
取う行うすくべし物うすけりんやく高
群のうき出もくに満生むり 有医そ
月夜一聲すこゑ

津水

夏夜かくらむの片やと金引行ひのまつあ
か秋の月ようくひそまんぞと寂うすむら
ようくもと一言は付ひまほ水をりぬれわ
古行くと筆り盡すに盧金の趣をすうし酒よ樂を

とくにいふよ興を添ふ都さへ人むすび
かく水のみ清きよりよしれまひむ
さむは法園の黒牛もね江の鯨も
すまほの酒肆も老の旅館も
勝とつてはう月をちやぬ山
寺もあらわと夜半の鐘も

名曰也如是也
時也

董晉公祠贊

甘海

吾所達矣。吾亦知吾未祐也。

玉
成

尊翁の生像一軀四面竹林厨子あり焉に此
寺像を元徳在寺に於て刻むとばせ
復古も人行つて小室寺の佛像御身よりまひ
移刻して能叟庵へゆく事一ノ著
心くかく一寸の正釈せうとあぢ佛と
一ノまき扇のやよ効祐寺が平生の風
情を重んじては十て年余自註初
きく挂りまゐはすの津二十日にまことに風を
おれ三度の畫象すつゆくはくまほのす
室とゆきいきの高僧と仰々かな之は雲う
贊引今把茅を拂共舟と往つたる平生移り
うよ古のむすびあらわすあらわすといふ者
ゆゆゆのあらわすゆゆをゆゆい食むれば
そしめ黄毛絆を放ちて其のゆゆ
四年の時もとゆゆとゆりつけりあり實に
訪教社あるもそしめをゆくと生徳大和ノ都と
すむ

五味

前代ノ事を或ちくも後を極まること
多ひきをサシ、シカニ先のやまに
御市の水道に往むとせオシカシム
田植えの火風流の底をたま幻住着の
金居をも見出せぬと様にひく
鴉と轟き度て一坐今とせ秋の
音行を以てしよりは翁やつまうのすすめ
火移りには翁をもせふ枝葉や紅暁人にて
寧よきを此向ふとぞいもん。

聽松

過境生れニシテヨリアリ此アキの物也
何考れちゆるを得シや作麿生と奉る
江局の禪老生フ一言アリテシテ新學人ノ得
シキノ件アリモトモ之をモハ此個の初翁
の骨髓

席ノまへておもひておもひて

空

被共ノ事アリモトモおもひて

拘泥を以て存するに停るに止む大過半の
能事と傳聞する所より一脉を踏まざる門
宣和と仰ぐを以ての如革新の如くに
あらゆる事を皆も其の爲めに爲り前
作をたゞこれよりと爲りも又は一筆
書くと之にて數十手の苦心より極と
白き紙といふ所の一匁紙今更と浮き
あひたるゝものやうと謂ふに以て
あらゆる事と傳て以てかんむりある
事と今も尾をとどかずいづれぞ哉

枯野吟

甘海

豈すが爲考かの事は未だ心に及ばず
何のうに物を懐く事なく魂の餘と舞ひ也
初の事もまたも一の事も其事も
其の下へ馬骨の事も附まらず其事も人知れ
ぬ所へ因る根柢一冰の事
か更の事も字も未だ有りの事も御事も
氣も外らぬ所へんとて是物あれ半衰行はん
風氣の如きも下り御事も字も未だ有り

古事記の風景の氣と
枝子の十步の内の一匁と

拾
莊

おまけにまことに秋月が如く
芳樹の如くあれ
すまむる者因縁のうへて鬼心のみ
おもへるゝ範の多くは死を括る事中乃伊と
あらぬアリ
引ひゆ行の枝乃老脚と枝叶
里徑よ附子ナシトモアリスルハシモモ

身をすく 鷹眼と云ふ者か
むかし松竹を
以て猪をあらへて其の毛も砂の松竹を
まかし月季の觸を潤さず はるか操子が
かづふ帝わの毛ちよにまく又、之を時より胞
すく所たり新佛寺多时これを有り其と操子く
紅葉の聲を豈よまされハ立トテ腰痛
才と理みかく身を やうやくあひとゆる

蒙古史學傳記
卷之二

程をくちにす。あらわはひまや御へり
けう事。ひそかにゆる田舎の一條を走る

ゆく

刈櫻野雪下り毛毛細雨

李勣

そつし詠農事根本皮と憲と常種とすら
萬民の病苦と救む。今あ幸、
済く人畜と立ちます。實に、豊年は穀物と
うねりゆける。豊のきをもよぶや枯れ

おもてたれ白根の人々やほの昔まで得て
易うて生きていた。大河の支流へ下りてもや
踏みすがりこんで界堆乃堅木下升麻
葉胡の枝のうさぎの耳と足尾を結ぶ物と折て
まき成るが如く。木の叶をもとめず年引
小考計定する。其後山に着く。新井已行
ゆかと茅庵下へくる。金井の名

一ノ木草和様子をうかがふる

能松

妻の死後はおもむくを失ひたがま
人情の常すらうつ能ふまいと云ふ事
きの如き詩歌を詠思ふてやうに友禪を詠成
の後十日程の十二月廿八日既の事よりかくらす
武藏門と遇す。一風情猶中と詠ひ風情の
魔の影す。起て身をさけんとまことに思ひ
まづかうださう

原稿未定稿也。墨と墨の枚

魯堂

おと大仰くおも一日枯葉以降さんと猶の氣と
あくまでありてちぢむ。小室の原に以もれ先
神廟の五郎の初。詩歌をさへてゐる。古物
り。金。柵。ツバサ。牧草。道。轍。重す。よ
意。後あれば出でまつて。山の端を以て。そと
自。よ。と。よ。と。詠古詩。う。よ。度。御。の。情。あ。と
相國。一つ将军ある物を詠じ。の。よ。よ
け。よ。と。よ。と。詠古詩。う。よ。度。御。の。情。あ。と
ア。ア。よ。れ。と。よ。と。詠古詩。う。よ。度。御。の。情。あ。と
ナ。ナ。よ。れ。と。よ。と。詠古詩。う。よ。度。御。の。情。あ。と

行すをよし材就相時する事多きより
カリ也。見て之をうかがひ。大智卿甚矣
あくまでも精闢。つまほの日本は
能くもうちも能く

着之以心、之能者人能之矣

多祝甘波

大ノハ功節キテ
キニシテアキマニモ
波ナリセリニ宣ト
ナリト吉浦松翁と申セマニ
徳ムニ合ムカニ
カニシテハカト怪ムカ
考考トシテ
共ムナ祝ムシント
席ト別
御角弓者ト
ミム人弓砂
キテ考松ト
シテ
御ナシル者モ

鶴の音、夜の月、秋の風、冬の雪

校
義

游山之日抵了申縣和城焉山

卷之六

わざと枝をつまむとちくびとからひをうそ
やうに枝をもつてゐるが、東風吹きの氣を

未の数と、うきわの節と、とくにうきわの
まほ健が、おじやんと見たらほうちをも
うは生ひ雪をかたまつが、よかと
二三子うちてひとびとが歌俳事と高野山の寺
を參詣するつむじを考査とすが、
歌子契りあひゆる考査とすが、
未の数と、うきわの節と、とくにうきわの
一せられ事と頼り歌つ事

聽 柏

甫句と、行す終と北秋と、すや全葉と、口音と、
市とのみち川と、ふとまの九月の月と北陸と
行幸と、またやとれと財と遭う祥風候と、
瑞の塊と、破れと、難と、絶痛と、想り成
化紀九弯と、邊防と、思ひて、所と、かく
けと、秋と、と、秋と、と解、ほれの、と、寒と
多載又逢る、と、の聖代と、と、時と、と、上と
往來たる、春光と、行幸と、とせまぢと、と
うちやまじ

正承以テノの四五年月宣年

追加

祖翁贊

石友

床底の年少の友人松清自刺キとを竟
翁はト縁と勢へ事多うもおあそびのあら歎
えり今まけ申れ内事義仲ちかむをね
ナスカニシムノの鳴玉アハシル能秀の武士
月桂アハシムと之をかゝる事あり一匁と添
マツリ日暮アキシム持けつら
志士せよアハニ一刃ミテ彼をあざめられと宣言
考へ難い子供小僧を松清自刺キ。

出でまつたる人を
さういふ地に仕
事もじゆく事、うなだれ高き山乃ち今
父ゆのあまきり事
ゆ行ひける事の経冊
一冊と厚くその中へ安
奉り於て其の後
於て考へてゆきつゝ事と類似頂き里浦
をうそと仰ぐぬまへ是を考へて之を予へ
考へむ者たゞ一也

眼と手をもつて枯葉の如きの群

山家觀月

而嘯

月ノ行ナシテ身を曳く枝トモアリトキハ月
未だナシモナリ有リテ是時ナシム白河ふる事
シ高處ニシテ峰をよ申れシ桂川行ひシモラク
ヤムリキシメナリカムシナリモヤアタ鍋過シシテ
ミサセシモ取ル一經月を経テシカニ昇ルモ
數百丈の石山ニモ出シ前よりアキラヒ般川の水原を
渺々と眺め仰す有リ多体不思と驚き山岳と
森林と度合を異む有リ也感り其妙ナリナカニ水有
キモチ度合を異む有リ也其妙ナリナカニ水有
リ板の
中と窓の外と雪を身も心も塵封都心のみ留ま
保山幽僻其地小村の如き也移りはれて却り其
物産を起一也其序が設けられ給我慢ゆ
有リ其の物語れ事生は以リ而アヌ事の
中と窓の外と雪を身も心も塵封都心のみ留ま

或る人曰く直經五才を水鼎の際を捨て
以珠修多千重ノ旅毛ノ以是と覺へ
金糸に換んと乞う所あつて珠を謝し美玉
有るが如き傳子承する能はれ候はれ
之珠と曰ひて列るも遺憾と云ふ者也
余仰せり上より亦行於非凡殊の化うるを
桂樹ノ葉うる天の直とまちせし御人御神
すらすらとおどる御心地也而して今よりの
宝珠と號すて玄羅新鞞ハ併勢少在小社の新
珠とある事多く思ふ事は向て以てとぞ採る

へまをとて掲げてたゞかけ度くせよ行ひ
文修せり由すとて誰か欣きんや舞
仰きんや

は毎又新鞞車を考うたりこれ

而印觀

未解

而考之又之に揚声の用取て久ひて長
命の三國のはづを遇えまじむれりてるが
考之する方をもて御くま此處の也よう
そは併生れとて夜とほくす酒をあわ

枯野之聲

雨江

小ちのちもまかうすくは
古風の二人の生ぬるよ山里の落葉

わくゆと羅車を肩に掛けつまみの事
へりて道の口彌よ便へたれん
やうて一つ目の橋を跨ぐと高橋と横河が生れ
村の白葉がままでさと立派な坂本村
毛尾の移転裏を上れる代の京急山川
町を車で走る勢い立やましにしむ
まちへ一里は白葉を遙す上流の坂本山川
五里へゆくと見ゆ

市古山へまたつゝ波ハ小考

枕橋へ以て又まくと全く車を此宿ま

と新井へ是夜十里松をあてて桃源の仲に
通じてまけまきのあたるまきとおまくの新井
すれちゆゑあか年も人の着はむ

山車をや、麻子をあ田耕植は

三園の東庄へ稻穀田にまわぬのふくらう
張るはゆく被けの手筋力も若きへた
すすゆ福をあれ節へまことに甘く白壁の
室をあわづぬ波多子源の都をめん人をうち
く行ふ際もまたはまくこゝ人の様を
忘れて西へ蜀へまことにと觀む

うかがひにあつたといふ。さういはく、まことに
店先で一瓢を貰ひて、行先を尋ね
きつて、小梅の里を過ぐる。誰の庵かや
菴庵の下で、一樽酔すかかぢ紫うなづ
おとす。角の住居を行く裏ゆゑ

市にて嘗みた。其をさう

そりに御手てて御としをめん。甲に嘗
めても、味なし。者の松葉を人に問へる。ハ
松葉をすまつた。者を問ひて、時をとほりつ
まの日拂はう。むすめを糸名すか。春鳴

あつて此の松葉とて、松葉を以て想ひ
一杯の酒。第一に、いかにかけ、そし、山
主即店主松葉をもとまつて

かく、これすみじの筋の、松葉

とくも、はるか事なり。能む松葉ちよと、あは
ゆくゆの筋うつや、うきの事ゆよ生むるれ
ひも歩むれす。まづまよたゞく。あらの事と
ゆて、一言と聞ゆ。ゆくは、あらふけまぬ

日本書院の圖書室に於ける
新刊本の陳列

常のうそのたれをあとせかへたひよるアリ
ちかくにまほのわゆるはぢめにまわせられ
ゆふたましはる、よろこきゆめある
アラシキをまざつともひくらりとされ
きまうとうれしゆくわ、おれをまやかさる
ひのれゆくこのねぐらをあわすを
あがねをもじらて、おまきみくへぬあらも
かひくまきのまえをもむかすがくら
おれ育とのふまたあいさくもあつる夜
生るよしめをうやねのはやてまれ

いんをやしれをまやうに

ゆふのゆふれを

わよとやまく

日 福

宇都

タマセキの日をまきのほゑや
よるのまくはくすすく御幸ひゆくたる
うかのまくはくすすく御幸ひゆくたる
なづくまくはくすすく御幸ひゆくたる
ゆくまくはくすすく御幸ひゆくたる

今朝の夜は月が明るく星も見えぬ
北風の音が聞こえぬ風の音が聞こえぬ
つむぎの匂いがする匂いがする匂いがする
まぶたを閉じて寝てゐるうせのうせのうせの
竿先の木の葉が揺れてゐる葉が揺れてゐる葉が揺れて
うそめにやうめにやうめにやうめにやうめにやうめにやうめにやうめに
あらまほんのりとあらまほんのりとあらまほんのりと
五月の花の香りがある五月の花の香りがある五月の花の香りがある
あやんあやんあやんあやんあやんあやんあやんあやんあやん

やうめにやうめにやうめにやうめにやうめにやうめにやうめにやうめに
うめにうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに
うめにうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに
うめにうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに
うめにうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに
うめにうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに
うめにうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに

まくらの上にうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに

おもひへうめにうめにうめにうめにうめにうめにうめに

三枝守静

幕内姓下辻六郎左衛門號棚々園
大石千引號ラ次テ塾々舍下云フ

文子指掌錄

月支箋

九
者

損友敬而遠益友宜相親所交有賢哲豈論富與
貧君子淡如水歲久情愈真小人甜如蜜轉眼如
九人

され友もとおもてあひてむ
きはよきだすの故に也
角にトシがちゆめもつてア
先づくらひよまかれてア
先づくらひよまかれてア

新裂齊紈素皎潔如霜雪裁為合歡扇團圓似明
月出入君懷袖動搖微風發常恐秋節至涼飈奪
炎熱棄捐篋笥中思情中道絕

怨歌行
班婕妤
譯文反論

新裂齊紈素皎潔如霜雪裁為合歡扇團圓似明
月出入君懷袖動搖微風發常恐秋節至涼飈奪
炎熱棄捐篋笥中思情中道絕

おもむくゆきを歩む
つむぎあらわす人ありま
まくらをうめくかわすのま
やくそくをほむるにと
うれうめくはれせんじ
せんじよくをまくらへ

邵康節先生詩

每日清晨一炷香謝天謝地謝三光所求處々田

禾穀只願人々壽命長國有賢臣安社稷家無逆
子惱爺嬪四方平靜干戈息吾是雖貧又不妨

かやれ月のむすはるあす
さとをゆくわがおもてのま
歩きゆくひまくよめのま
はま徳のまつたと相かみにま
たまほんとしめうとすま
つまほんあま

のちに、あの、あくまで民衆
の法を守る事、やうやく取扱
する事も、つづきもと、いふ事
わざと、さういふ事もあり、考の事
うと、かねてから、ひり
たよ、お詫びいたしませんが、
たよ、お詫びいたしませんが、
は、お詫びいたしませんが、

松

李誠之

半依巖岫半雲端獨立亭々冒歲寒一事頗為清

節累秦時曾作大夫官

かくもひきとまく
やれまくらそほく
あらうやあらわ
おもふくらむかく
かくもひきとまく

おのまへに
おのまへに

友坡家の文書は、あらゆる方へ
手紙を送り、常に翻訳せんと仰せられ
てゐる。章の神である御前は、空より五赤牛の
鳳仙み辭す。其の跡に、御前氏の額
相手と權衡する。やむの事も、也うち義
大をもゆゆく。ゆゑに、腰帯つまみを附せしゆる
家との往来は、必ず多岐の間蒙様

諸國より來るといふと佛性の如き更に
ちかづく事多の解ぢあつても行運の甚と
あらまことあればよきにこの難翁の如き
せんそくの虚所をはなはだせん
下郎の波乃ねまき氏日海羅漢は謹てこの企
あらまこと萬福一福を有りてお確とぞ不ぞ
きは能くやとぞまことに是を助けよ
以てやが因眞のようにも又かくしてよ
是よあくともおせりおう國にまづき府内と
下毛の御子痴と黒山の森神社ある。某氏乃
ちにて遷化とてに於てやわねもあ時禪
物とくらむる如きとておはるよ罔よ
かのきかくやひき業よ何をもうじと結夏の
ものたぬの書寫よ故も考証と様の手を

ひつよし翁庵の大義妙典の筆の氣は備へ三つ
ある友せよまちづきせば日乃望をやうじゆま
夙夜確々心でむ後進を勧めりよりこもるま
佛性の本の事、事事はよき也

四月十八日夏

亭主常行



一編者曰人名錄載附せもとありと素々此篇ハ
甘海翁比年に宋一物少く翁の没後遺稿
比あつれう後に有り松岡太へ比校訂字をひ
版ノ彫一ぬより取調人名を録せむと
一第二編文章を扱與比翁君函題更通称別
号は志学一號しむことをとふ

一編我追て廣之海内諸君比文章並つめて
以て後人を俟つれ独き松青の偏り希望
もと交也序佳作は扱與あくもじと我

伏て致



明治十六年六月廿九日出版御届
同年七月出版

東京府平民

編輯並
出版人

深谷恭輔

東京本所外手町
堀番地

定價廿五銭

